

地域活性化を目指して

なかたねさくら祭り

2月23日にふれあいの里広場で、『なかたねさくら祭り』が開催され、晴天にも恵まれ多くの家族連れで賑わいました。

舞台では、野間幼稚園児による太鼓演奏やよいらいきing、各団体によるフラダンスや中高生男子で結成された男子ングによるダンス披露。また、あつち向いてホイ大会や当選確率の高い抽選会もあり会場が盛り上がりました。

出店では、豚汁の無料配布やフリーマーケット、うどん、フランクフルト、焼き芋などの販売。体験型コーナーでは、キックボリング、ラジコン、DIYコーナーなどがあり、笑顔いっぱいの子どもの姿がみられました。

当祭りは、地域活性化支援交付金事業を活用しており、さくら祭り運営委員会主催、商工会青年部・女性部などが協力団体として会場を盛り上げました。



地域おこし協力隊通信 (No. 39) 中種子町の法華宗にまつわるハナシ

私の家は大阪では珍しく代々法華宗である。日典が種子島に伝えた法華宗を島主の十一代時氏が法華宗本源寺を建立、日良が開山し、律宗から法華宗に全島改宗したということを知り、種子島に来て初めて知った。

これも縁だと思い、以後、種子島の法華宗にまつわるハナシを何かと気にすることになった。

律宗の正法寺の目前に法華宗の浄光寺を日良が建立しはじめると、正法寺住職の日高左京之進が正法寺から日良めがけて矢を放つ。が、その矢は全て岩に阻まれ日良には一本も当たらず、その法力に感服した左京之進は法華宗に帰依した、と云うハナシは有名。浜津脇あたりに夜ともなれば火の玉が出て、崖の上から妖怪が砂をバラバラまいたり、人間の片腕だけが目前にヌツと出たり、海から赤ん坊の泣き声がするなど行人を悩ませていた。そこで、日良がここに大石を運ばせて南無妙法蓮華經と刻んで建ててからはそれらの現象がなくなった。

私が驚いたのは、中種子町に日蓮が書いた曼荼羅が残っている。ちなみに法華宗の宗祖は鎌倉時代の日蓮である。現存して

いる直筆の曼荼羅は全国に120幅余りという。その内の一幅が日輪寺にある。日輪寺では劣化が激しいため箱の中で着物の生地に曼荼羅を包んで保管している。ただし、1年に一回ほど虫干しで箱のフタを開ける。さらに驚いたというより興味を持ったのは、この曼荼羅がなぜここにあるのかである。この曼荼羅、ヌイという女性が寄贈したと言われている。実は、なぜ彼女がこの曼荼羅を所有していたのかは、ほとんど分かっていないらしい。ヌイは大阪からの公儀流人だった。優れた器量の持ち主で熱烈的な法華宗の信者でもあり、野間村の横目役の息子と恋に落ち長浜の海で心中したという。ヌイが死んだあと、ヌイ似のキレイな顔をした幽霊が現れたという。不思議な女性である。日輪寺には彼女の石塔が建つ。

法華宗、ヌイと同じ現在の大阪市の出身で区ではお隣さん、そして、私が退任後に起業する事務所は長浜の端、海が望める屋久津にある。これはキレイな顔をしたヌイの幽霊が、ここにおいでおいでをしたのかな、とほとんど真剣に思っている。

(山村)